

市民科学ニュースレター

茅野市の方言学者、牛山初男氏の資料

1 牛山初男氏

牛山初男氏(1907-1983年、写真1、以下、牛山氏)は、茅野市湖東出身の方言学者、言語地理学者です。方言研究の世界では、東西方言の境界の実時間比較を行い、境界の位置が変動しないことを発見したことで有名です(大西拓一郎「言語地理学からみた諏訪と市民科学」『ニュースレター』4号(2024年3月)参照)。

牛山氏は、大学や研究機関に所属して研究を進めたわけではありません。諏訪地方を中心におもに高等学校の教師を務め、中でも永明高等学校(現、茅野高等学校)において長期にわたり教鞭を執りました。

したがって、牛山氏は、まさに市民科学としての方言学、言語地理学を実行した方になります。同時に、牛山氏のことを考える上では、研究者であるとともに教育者としての側面も重要です。



写真1:牛山初男氏(親族提供)

2 牛山初男氏の生涯

明治40年に茅野市湖東須栗平で生まれた牛山氏は、大正11年(1922年)に旧制諏訪中学校(現、諏訪清陵高等学校)に進学しました。当時、八ヶ岳のふもとの山村から旧

制中学校に進めるのは、学業が優秀であるとともに、ある程度裕福な階層に限られていました。牛山家は、広い農地を持つ豪農だったようです。

この時期に諏訪中学校に在学したことは、この地域の市民科学史を考える上で重要です。というのもキーパーソンである三澤勝衛がまさにこの時期に(1920年に赴任し、1937年に病没するまで)諏訪中学校で教壇に立っていたからです。

牛山氏は、諏訪中学校卒業後、東洋大学に進学し、国語史・文法学を専門とする橋本進吉や文法学・語彙史を専門とする小林好日の指導を受けました。後に橋本は東京大学、小林は東北大学にと、それぞれ旧帝国大学に異動しますが、いずれも国語学・日本語学史を語る上で欠かすことのできない学者であり、優れた指導者に恵まれた教育環境で大学時代を過ごしたことは間違いありません。

そのような牛山氏の業績と生涯の概要については、大西拓一郎(2024)「信州諏訪における市民科学としての言語地理学—牛山初男、土川正男、浅川清栄—」日本方言研究会『方言の研究』10号(ひつじ書房)に記しましたので、参考にさせていただけると幸いです。

3 牛山初男氏の資料

上記の牛山氏についての論文を記すにあたっては、ご子息(次男)の牛山博氏とその奥様であるよし江氏からお話をうかがいました。その際に牛山氏の資料が牛山家に保管されていることがわかりました。牛山氏の研究活動は、ご家族にも敬意をもって理解されており、遺された資料は廃棄されることなく、約40年にわたり取り置かれていたのです。

もともと牛山氏は、現在の博氏たちの住まいのすぐ近くに書斎を構えていたのですが、没後にそこから博氏たちの現在の住まいにある蔵の二階に資料を移したとのこと。よし江氏が中心に作業を行ったそうですが、資料



写真2:牛山家の蔵で保管されていた資料

の内容や性質はわからないので、未整理のまま袋に詰めて、蔵に上げたとのことです(写真2)。

乱暴なように思われるかもしれませんが、これは致し方ないことだと思います。たとえ親族であっても、詳しく知らない遺品にはなかなか手が出せないものです。むしろ、もとのままで保管されていたことを喜ぶべきでしょう。

資料の今後については、さらに後の世代、つまり牛山氏の孫やひ孫の世代には、牛山氏自身のことすら知られなくなるだろうから、廃棄されるかもしれないとのことでした。そこで、博氏、よし江氏と相談して、まず、大西が資料全体の目録化を行い、保存すべき資料については、保管先を確保し、残りについては、牛山家の判断に委ねるということになりました。

すべての資料が保存できればそれにこしたことはありませんが、蔵の二階の四分の三ほどを占める程度の分量があり、これをまとめて受け入れる機関はまずないだろうし(国立国語研究所や地域の博物館でもすべてをそのまま受け入れることは不可能)、受け入れを依頼するにあたっては、目録が必要なことは経験的にわかっていました。

選択した上での寄贈先の候補としては、茅野市八ヶ岳総合博物館と国立国語研究所を想定しました。

中央でも注目された、地域の人物誌資料であるとともに、当該地方の方言資料や教育史にかかわる資料も含まれることが予想されることから、茅野市八ヶ岳総合博物館長に相談したところ、事前の了解が得られました。

また、私自身が国立国語研究所で研究図書室の選書を担当していましたので、日本語関係の資料で国立国語研究所が所蔵していない資料については、研究所の図書室が受け入れてくれる見通しが立っていました。

資料は、ほとんどが茅野市の指定ゴミ袋に詰められて、

口は固く結ばれていました。一見乱雑ですが、この状態で蔵に置かれていたことが幸いしたのか、中は比較的良好的な状態でした。とはいえ、40年近く放置されていたので、蔵の中であっても、多くがかなりほこりをかぶっていました(ただし、ほこりは詰める前からの可能性もあります)。当初、この袋類がどれだけあるのか把握できなかったのですが、結果的には50袋ありました。

これらの袋を片っ端から開封して、目録化し、保管先を決定する作業にとりかかりました。2024年の4月のことです(もう少し早くとりかかることも検討したのですが、標高の高い当地の冬の気温は零下10度以下になることもあり、指先がかじかんで作業にならないと判断されることから暖くなるのを待つことにしました)。さすがに蔵の中で行うのは気の毒だとのことで、牛山家の農作業部屋を貸してくれることになりました。牛山家では、よし江氏が、現役で農業を継承されています。資料の袋を蔵の二階から下ろしては、軽トラックで作業部屋に移動する作業をよし江氏と何回も繰り返しました。お手伝いいただいたよし江氏に感謝したいと思います。

4 資料への期待

資料を前にして、期待したことが3点ありました。

第1点は、三澤勝衛との関係が見いだせないかということです。上記の論文にも記載したのですが、牛山氏の論文には、三澤勝衛への言及がまったくありません。資料の中に三澤の著書などが含まれていないかという期待です。

第2点は、未刊の茅野市方言辞典のもとになるような資料が含まれていないかということです。やはり上記の論文に記載したように、牛山氏は晩年、茅野市方言辞典を作成することを構想していたらしいのですが、結局実現しませんでした。そのもとになるような作業資料などが残されていないかということです。

第3点は、牛山氏が行った言語地理学調査の原資料が残されていないかという期待です。実は、牛山氏の特に東西方言の境界線に関する論文は有名なのですが、具体的な調査方法やデータの整理手順がいまひとつはっきりしません。調査資料が残されていれば、その点の解明につながることを期待されます。

5 資料とその分類

4月から始まった資料の調査、目録作りですが、牛山家

に毎週のように通うことで12月の頭には全体の目録ができあがりました。

資料は全部で約1,000点にのぼりました。ただし、中には、牛山氏のご家族のものなども紛れ込んでいたので、900点弱が牛山氏に関連するものと判断されました。

資料のほとんどは、書籍でした。そして、その中には期待した、三澤勝衛に関するもの、茅野市方言辞典の直接のもとになるような原稿類、方言調査の原資料は、いまのところ見つかっていません。したがって、上述した期待はかなえられていません。

ただし、いくつか開封していない資料の束があり、手がかりになるものである可能性は否定できません。これらは茅野市ハヶ岳総合博物館での保管を依頼し、調査を継続する予定です。

しかし、私の期待と適合しないということだけで、この資料群の価値が下がることはありません。以下のような、貴重なものも含まれていたからです。

たとえば、木崎夏季大学関係の講義ノートです。牛山氏は、夏に長野県大町市の木崎湖畔で開催される信濃木崎夏季大学に参加して、その際に詳細な講義ノートをとっていました。木崎夏季大学では中央から招待した著名な学者の講義が行われます(現在も継続されています)。そのときのノートが残されていました。

牛山氏はそのほかにも講義ノートを多く残しており、中には国立国語研究所初代所長、西尾実が諏訪教育会で行った講演の記録もあります(写真3)。

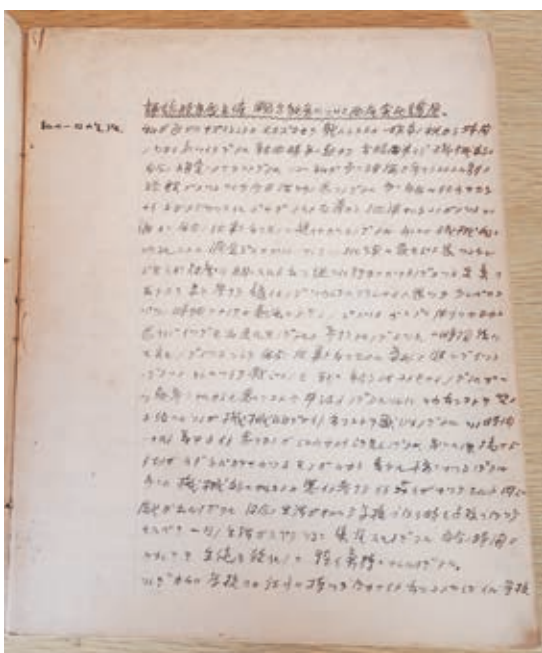


写真3: 西尾実が行った講演の講義録

これらのノート類は25点あり、記録された内容は、おそらく講演者の著作にも残されていないものも多いのではないかと推測され、貴重なものです。

書簡類も多くありました。これをたどることで、当時の市民科学者のネットワークを探ることができそうです。また、書簡の中には、牛山氏の著作に対する指摘なども見られ、それをもとに牛山氏自身が著書に修訂の書き込みをしているような資料もあり、研究に対する真摯な姿勢がうかがえます。

永明高等学校花時分校・定時制高校の研究集録もありました。ここには牛山氏とともに当時の学生自身が研究した成果が残されています。分校・定時制の教員と高校生たちの活動を記録するもので、当時の地方の若者たちの生き方や考え方をとらえるための重要な資料と考えられます。花時分校の集録は手書き原稿を製本したものであり、ほかにはない一点ものではないかと思われます。

6 資料から見えること

資料全体をおおまかに分類すると、表のようになりました。ここでは分類に対応する資料数の多いものから順に並べました。

分類	資料数	割合 (%)
国語学	298	33.3
国文学	177	19.8
方言学	128	14.3
その他	58	6.5
国語教育	43	4.8
中国文学・哲学	35	3.9
言語学	30	3.3
農業	28	3.1
地方史	27	3
哲学・思想史	23	2.6
国史	21	2.3
世界文学	6	0.7
東洋大学	6	0.7
諏訪中学・清陵高校	4	0.4
永明高校・茅野高校	4	0.4
民俗学	4	0.4
世界史・東洋史	4	0.4

表: 資料の分類と件数・割合

大学時代から専門とした、国語学・国文学の資料が多いことがわかります。資料の中には、国文学の古典資料が多

く含まれていました。その中にはかなりの書き込みが見られ、古典を熱心に読んでいたことがわかります。

また、中国文学・哲学関係の資料(漢文・漢籍)にもやはり書き込みが多く見られました。明治時代に生まれた研究者の土台が、現在のわれわれとはかなり違うことを感じさせます。

資料の中には、論文や著作物の写しもありました。これらはコピーではありません。かつては手で書き写していたことがわかります。

国語調査委員会『音韻分布図』の写しもありました(写真4)。もちろんカラーコピーではありません。模写し、そこにおそらく色鉛筆の類で塗りを与えているものです。資料のスケッチとも言えるでしょう。このような苦労の上に立って研究が進められていたことに頭が下がる思いです。

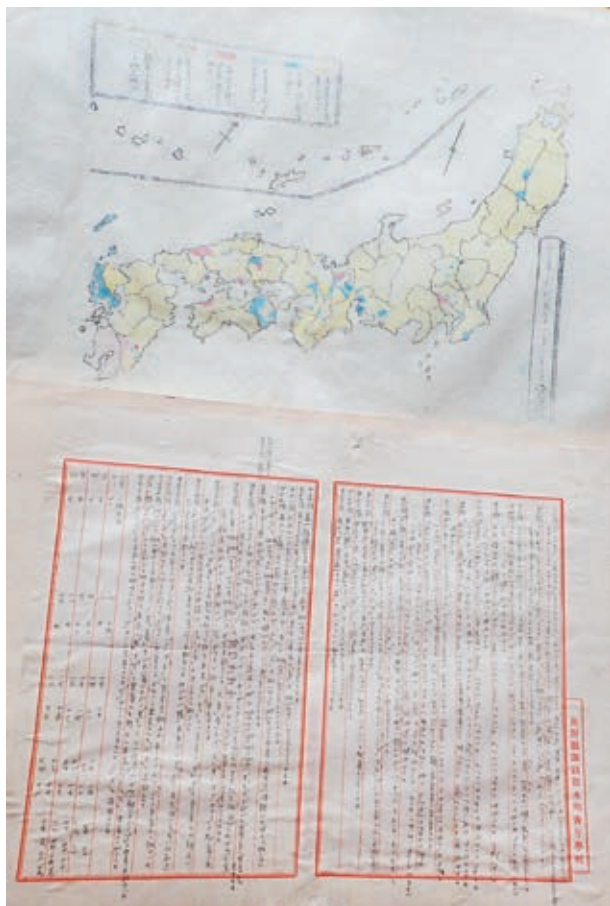


写真4: 音韻分布図の模写

農業関係の資料も30点近く含まれています。牛山氏は、永明高等学校の分校時代から、国語だけではなく、農業も教えていました。自身が農家の出身であり、また、この地域の主要産業は農業です。当時の永明高等学校は職業高校としての性格も持っており、農業の授業が行われていました。花蒔分校時代には、牛山氏が先頭に立って、特産の漬け物を開発することも行われたようです。栽培試験の記録もあり、地域とその気候に根ざした産業振興を高等学校の教育現場で実践していたわけですから。

この活動は、三澤勝衛の「風土産業論」を想起させます。牛山氏は、三澤勝衛の思想を著書からではなく、諏訪中学校の授業を通して、心に刻み込んだということは考えられないでしょうか。三澤は「教科書は古墳にして、著書は墓場である」ということばを残したとされますが、それを実直に守ったと考えるのは穿ちすぎでしょうか。

7 資料の保存と活用

3節にも記したように、資料の一部は、茅野市八ヶ岳総合博物館と国立国語研究所研究図書室に収蔵される予定です。その際に以下を基準としました。

・茅野市八ヶ岳総合博物館(約230点)

- ノート等の手書き資料
- 書き込みのある資料
- 書簡類

・国立国語研究所研究図書室(約40点)

国立国語研究所研究図書室未所蔵の日本語関係資料資料全体の目録は、webでも確認できるように工夫したいと考えています。

また、上述のとおり、未開封の資料が一部あるとともに書簡類については、未整理です。これらの整理を通して、市民科学史と地域文化の解明を続けていきたいと思えます。

大西拓一郎(国立国語研究所)

三澤勝衛先生の研究・教育実践から学ぶこと

1 はじめに

大正から昭和初期の時代、現在とは異なり、最新の情報や資料をリアルタイムでは得難い地方にあって、大学や研究機関に属さず、いわゆる在野の研究者として、研究及び教育活動を精力的に展開し、その研究実績が中央でも高い評価を受けていた教師が信州には多くいた



図1:三澤勝衛(「三澤勝衛先生より」)

といわれています。諏訪地方におけるその代表的人物として、大正9年から昭和12年に亡くなるまで、旧制諏訪中学校(現諏訪清陵高等学校)に在職していた三澤勝衛(図1)をあげることに異論はないでしょう。

そして、三澤の研究及び教育に取り組む姿勢は、勤務校において直接教えを受けた生徒や卒業生のみならず、論文や諸活動等を通じて、学界そして地域の人々にも大きな影響を与え、諏訪地方における、いわゆる「市民科学」の発展に大いに寄与したといえます。

2 三澤勝衛先生記念文庫

三澤が勤務していた旧制諏訪中学校、現在の諏訪清陵高等学校の体育館裏・グラウンド脇に、同校創立70周年にあたる1965年(昭和40年)4月に開設された「三澤勝衛先生記念文庫」(以下、「三澤文庫」)があります。現在の建物は、昭和60年から63年の校舍全面改築に伴い新築されたものです。

三澤文庫には、三澤の蔵書、論文、著書、原稿、写真、フィールドノート、地図、資料等が所蔵されています(図2、図3)。三澤の研究成果を知ることができる貴重な資料が所蔵されているわけですが、三澤勝衛という「人」となりを知ることができるとともに、研究のために費やした努力の跡を知ることができるという点でも貴重な存在です。



図2:三澤文庫内の調査野帳・講演草稿

以下、三澤文庫収蔵

の資料(毎年購入されている最新の地理等に関する文献を含む。)を基礎資料として、三澤の研究者そして教育者としての足跡をたどってみました。



図3:三澤文庫内の原稿草稿・著書

3 三澤の教え・実践と現在の教育

現行の高等学校学習指導要領(平成30年3月告示、令和4年度から年次進行で実施)では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進が掲げられています。これは、近年、「学習」や「学び」の語が意識されて使用されていることと関連しますが、学びの主体は生徒であり、「自ら考える」ことの重要性が説かれているわけです。これまでの授業の標準的な形態は、極端かもしれませんが「chalk and talk」の語が象徴するように、教員が講義して必要事項を板書し、生徒はこれをノートに筆記する、といったものでした。生徒がこのような授業を通じて、知的好奇心を刺激され、学問に対する興味・関心を高めたことも事実でしょうから、講義型の授業を全面的に否定するものではありません。

しかし、現代社会は、多様な事象が複雑さを増し、予測困難な社会、解のない社会と言われていています。このような社会を生き抜いていくためには、従来の知識を蓄えることを中心とした学びから、主体的に人生を切り拓いていくための学び、能動的な活動の過程で理解を深めることを中心とする学びに転換していく必要があるわけです。

近年、授業にグループワーク、集団討論、フィールドワーク等を積極的に採り入れる教員が増えているのは、この流れに沿うものです。そして、これに伴い、高校生の課題設定能力やプレゼンテーションなどの表現力は、飛躍的に向上してきているように感じています。授業のあり方により、生徒の意識や姿勢は確実に影響を受けて変化するのだと思います。

三澤が90年以上も前に実践していた授業のスタイルと印象について、実際に授業を受けた生徒たちは、次のように述べています。

・具体的な経験領域から出発して、本質的な理解に到達

させる授業展開

- ・教科書を使わず、ノートをとらず、フィールドワークを重視した授業を展開
「自分の頭で考えろ」が口癖
 - ・ものを見、考える力を植えつけ、科学する心を教えた(新田次郎)
 - ・「理解の授業」「感激とショックの授業」(林百郎)
 - ・強烈に着想力を養う頭の訓練の時間だった(藤森栄一)
- 現在、国がそして長野県が目指す「学び」のあり方は、三澤が実践していた授業や諸活動と重なるものが多いように思います。このように考えると、三澤の実践の先進性と妥当性は疑うものがないといえるのではないのでしょうか。

また、三澤は、平素の授業と受験のための指導とははっきり区別していたようです。三澤は、自身の信念に基づいた授業スタイルを貫きますが、一方で教員として、受験生への支援についても、過去問を研究し、受験問題の傾向をきちんと把握したうえでプリントを作成するなどの対策を講じています。校内における受験対策、科学会等の活動、そしてさまざまな地域の課題に対する三澤の関わり方や対応をみると、多忙な生活の中でも、協力や支援を惜しまなかった姿が見えてきます。このような三澤の姿勢は、「市民科学」に関する対応における、三澤に対する好意的な評価につながっているのではないのでしょうか。

4 諏訪中学校着任まで

三澤の諏訪中学校における研究及び教育実践について考察するにあたり、尋常高等小学校高等科卒業後、中等学校の教員になるまでの足跡を辿ってみましょう。

三澤は、1885年(明治18年)、現在の長野市信更町の農家の長男として生まれました。当時は、尋常小学校4年、高等科4年の時代ですが、高等科卒業後は、いったん、家業である農業に従事することになります。それでも教師という職業にあこがれをもち、勉学に励んでいた三澤は、農業と教員生活を必ず両立させることを条件に、猛反対だった父親を説得し、尋常小学校の補助代用教員になりますが、これ以降、小学校教員に関わる資格を次々に取得していきます。そして、ついに1907年(明治40年)には、尋常師範学校卒業生と同等の本科正教員免許状を取得するのです。この間の猛勉強ぶりは、次男三澤春雄の「三沢勝衛略伝」(『三沢勝衛先生』掲載)に詳しく記されています。

さて、松本小学校に在職するころから、三澤の勉強の主たる対象は、教育学及び哲学から地理学へと及んでいき

ます。実学でなければ駄目であると考えようになったことがその理由のようです。さらに、親友藤田道雄の誘いもあり、中津小学校在職中の1915年(大正4年)に文検を受験し合格します。三澤30歳の時です。文検とは、文部省師範学校中学校高等女学校教員検定試験のことです。1918年(大正7年)、藤田が文検の数学科に合格し、松本商業学校(現在の松商学園高等学校)に転じたことから、三澤も同校に転じ、いよいよ三澤の中等学校での教員生活が始まります。

中等学校で地理を教えることになった三澤ですが、全国の主要鉱山から鉱石の標本を取り寄せて生徒に見せるなど、独自の授業スタイルを作り上げていきます。そして、その実践の根底には、自分が納得するまでとことん準備をし、生徒たちにも自分の頭で考え、実証することの楽しさを伝えることがあったといえるでしょう。まさに、諏訪中学校時代の三澤の実践につながるものです。

5 諏訪中学校時代

1920年(大正9年)、三澤は、校長小松武平に招かれ、長野県立諏訪中学校(同年4月23日、長野県諏訪中学校に改称)教諭として着任します(3月31日付け)。そして同年、文検の「博物科ノ内鉱物」に合格します。全国で合格者6名という難関でしたが、諏訪高等女学校(現諏訪二葉高等学校)教諭で親友でもあった池内精一郎、千野光茂も同年に合格しています。ちなみに、池内は、昭和2年に設立された諏訪地理同好会の活動において、諏訪中学校の三澤、牛山傳造とともに、指導に当たった人物です。

三澤は、諏訪中学校に着任すると、いよいよその真価を発揮し、研究及び教育に情熱的に取り組んでいきます。着任の翌年1921年(大正10年)6月ごろから、太陽黒点の観測を始め(図4)、1922年(大正11年)には、「諏訪製糸業の地理学的考察」を発表します。三澤が残した124編の論文の最初のものになります。



図4: 太陽の黒点観測の様子



図5:三澤の諏訪中学校での授業の様子

三澤の諏訪中学校時代の授業の様子や生徒への影響については、三沢先生記念文庫発起人会編集の『三澤勝衛先生』（昭和40年7月発行）に、教え子、同僚そしてさまざまな関係者によって述べられています。三澤を知ることのできる最も重要な基礎資料といえるでしょう。本稿の3の項で紹介したのは、その一部です（図5）。

さて、三澤の研究者としての業績を、簡単にまとめると次のとおりです。

太陽黒点の継続観測や黄道光の観測などの「天文学」、諏訪地方の風向分布・降水量の分布などの調査、局地風の研究、植物生態学と気候の研究、防風林の地理学的研究、上諏訪町（当時）の気温分布観測などの「小気候学（局地気候）」、綿密な野外調査、問題設定、発想、研究方法の独創性に特色をもつ「人文地理学」、地理学は解明自体が目的であり、地理教育は風土性を理解させ、また、その解明を通じて生徒の人格を高め、その完成を図るのが目的であるとする「地理教育論」、そして、風土産業の構築のために地域を分析していく地理学を重視し、学校教育だけでなく、社会人への風土教育も提唱した「風土論」です。三澤の精力的な研究は、実験・観察・観測・野外調査等をもとにするものですが、これを支えたのは、さまざまな分野の論文や書籍を、金銭的にもそして時間をも惜しまなかった大変な読書量によるものであることも忘れてはなりません。

次に、教育者としての業績ですが、授業スタイルや受験指導については前述のとおりです。そして、諏訪中学校「科学会」の指導・育成は、三澤について語る際、最も重要なものといえるでしょう。

科学会は1922年（大正11年）に発足しました。現在のクラブ活動のようなものですが、生徒たちの自主的な研究の場となりました。数学、物理、化学、地学、歴史、博物、天文・気象、写真の8部から成り、後に天文と気象が分離し9部になります。毎年展覧会を開催しますが、発表は独創性があること、オリジナルな研究であることが条件でした。三澤の研究及び授業スタイルに共通する姿勢とい

えるでしょう。

三澤と科学会の関係を象徴する一例をご紹介します。三澤の人柄が感じられるとともに、このような関係性は、諏訪中学校の生徒に対してだけではなく、地域の人々や研究に関わった人々に対しても同様の接し方をしていたのではないかと推察されるからです。

三澤は『科学会誌 第3号』（昭和5年1月）に「1929年8月上旬に於ける諏訪地方の風向分布に就いて」を発表しています（図6）。論文の冒頭では、各地方に発達する風向は、その地方の産業はもちろん、一般の生活様式に大きな影響を与える、という問題意識を示し、風向を調査し研究する作業は、気象学のみならず

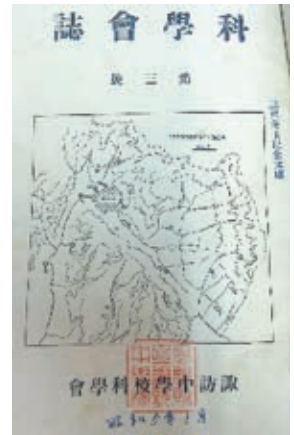


図6:『科学会誌 第3号』

地理学上も意義あるものである、と述べ調査結果について考察しています。実は、この風向に関する調査資料は、科学会の気象部有志16名（リーダーは部長の古畑正秋）が夏季休業中の10日間、各自が朝夕の2回ずつ観測したものでした。三澤は古畑から調査資料を示され、その整理と説明を求められましたが、多忙のため締切期日が来てしまう。しかしながら、多忙であることに変わりないが、何とかその責めを果たしたい、と執筆に至った状況を説明するとともに、学術的にこの観測は大変意義があるものである、と生徒たちの活動を大いに賞讃しています。このような関係性が、生徒の意欲を喚起したでしょうし、地域の研究に携わる人々との関係においても同様だったのではないのでしょうか。模範となる研究への取組の姿勢だけでなく、よき指導者でありよき助言者、そしてよき協力者としての姿が生徒、地域の人々の研究への取組に与えた影響は大きかったと考えられます。

なお、このことに関する考察は、今後、諏訪中学校の授業及び科学会の活動、昭和2年に設立された諏訪地理同好会の活動などをみていくことでさらに深めていきたいと思えます。

北澤 潔（長野県上田高等学校 前校長）

引用参考文献

- 三澤先生記念文庫発起人会(1965)『三澤勝衛先生』
- 諏訪中学校科学会(1930)『科学会誌 第3号』
- 田中啓爾(1965)『三沢勝衛君の追憶』『第三地理学論文集』
- 諏訪中学校校友会(1930)『校友会誌 第29号』

展示

小惑星イトカワ・リュウグウ ダブルサンプル展示

2024年9月28日から10月14日に茅野市八ヶ岳総合博物館において、市民科学プロジェクト共催による「小惑星イトカワ・リュウグウ ダブルサンプル展示」を開催しました。2つの小惑星リターンサンプルの同時展示は、全国巡回3か所目、リュウグウ試料の公開展示は長野県内初です。小惑星試料実物を見られるとあって、連日、県内外から多くの方が来訪され、2ミリほどの試料を熱心に見学されていました。会場では、市民科学プロジェクトが以前に取り上げた信州での小惑星探索についても紹介され、最新の宇宙探査ミッションと市民科学の接点を知ってもらう機会にもなりました。



速報 まだまだあったよ 知らなかった！諏訪ことば

2025年1月4日から2月28日に茅野市八ヶ岳総合博物館において、ミニ展示「まだまだあったよ 知らなかった！諏訪ことば」を開催し、2月24日には、国立国語研究所の大西拓一郎さんによるミニトーク「ことばの地図を読む」も行いました。詳しくは次号にて報告する予定です。お楽しみに。

講演会

ブラッドリー・シェーファー博士に聞く「歴史天文学の最前線」

2024年9月28日に茅野市八ヶ岳総合博物館において、ブラッドリー・シェーファー博士(ルイジアナ州立大学名誉教授)による講演会を開催しました。長野高専の大西浩次さんによる全体説明の後、諏訪清陵高等学校天文気象部の皆さんによる三澤文庫資料の紹介が英語で発表され、シェーファー博士からは「歴史天文学の最前線」についての講演が行われました。博士の講演については、名古屋大学の早川尚志さんによる随時の通訳と解説で補われました。宇宙の長期的なことが意外に年単位程度の観測でも確認できることなど興味が尽きない話題にあふれていました。古記録から天文現象を丁寧に読み取ることで、現代恒星物理学に大いに役立つ情報が得られると紹介され、資料アーカイブの重要性について示唆のある貴重なお話でした。



シンポジウム

速報 郷土に向かい合う人々ー信州・諏訪の市民科学

2025年2月11日にすわっチャオにおいて、シンポジウム「郷土に向かい合う人々ー信州・諏訪の市民科学」を開催しました。4件の発表を受けて、総合討論が行われました。詳しくは次号にて報告する予定です。お楽しみに。

プラネタリウム

星の和名をテーマにした作品を作成中です。完成後、ニュースレターでもお知らせします。



資料寄贈

日本変光星研究会から変光星観測の資料が茅野市八ヶ岳総合博物館に寄贈されました。日本の変光星観測データは、電子化されて公開されていますが、その入力元になった貴重な資料です。



市民科学プロジェクト 市民科学ニュースレター No.6

発行日：2025年3月25日発行

編集・発行：国立国語研究所 制作・印刷：(株)エイブルデザイン

市民科学
プロジェクトHP

